

スウェーデン・フランスからみる ヨーロッパ理解のための世界地誌教材の開発

Development of Regional Geography Materials to understand Europe through Sweden and France

田部俊充
TABE Toshimitsu

[Abstract] The purpose of this paper is to develop Regional Geography Materials to understand Europe through Sweden and France. It was developed based on a field survey of historical sites in France in order to enhance short-term overseas training programs accredited by Japan Women's University, social studies classes in elementary and junior high schools, and Geography and History, Civics classes in high schools.

【概要】 本稿は、スウェーデン・フランスからみるヨーロッパ理解のための世界地誌教材の開発を目的としている。日本女子大学公認海外短期研修や小中学校の社会科授業、高校の地理歴史科、公民科授業を充実させるために、最新の現地フィールドワークを踏まえて世界地誌教材の基礎資料の開発を行った。

【キーワード】 ヨーロッパ理解、フィールドワーク、世界地誌教材、スウェーデン、フランス

I はじめに

本稿は、スウェーデン・フランスからみるヨーロッパ理解のための世界地誌教材の開発を目的としている。日本女子大学公認海外短期研修「スウェーデン海外短期研修」、小中学校の社会科授業や高校の地理歴史科、公民科授業を充実させるために、現地フィールドワークを踏まえて開発した。

スウェーデン海外短期研修は、2014年、2015年、2016年度と継続して得た日本女子大学特別重点化資金（定行まり子代表）により、学内の学際領域による研究者の合同調査を共同研究として就学前教育から高等教育までの調査内容をESDの視点でまとめたことをきっかけにスタートした（田部ほか2017）。学内外の研究成果を踏まえ、大学公認海外短期研修「スウェーデン海外短期研修」として、2016年度（2017年3月（第1回））に36名、2017年度（2017年9月（第2回））に23名、2018年度（2019年3月（第3回））に63名の参加者を得た。2022年度（2023年3月（第4回））は多くの応募者の中から抽選し、40名の参加者を予定している。この数字は、「スウェーデン海外短期研修」が、全学の学生・大学院生たちの支持を集めていることを物語っている（田部ほか2019、田部・浅野2021）。十分な事前指導が必要とされている。

さて、高校地理歴史科、公民科は2022年4月より「地理総合」「歴史総合」「公共」という科目名となり必修となった。科目名や内容の変革だけではなく、「主体的・対話的で深い学び」という教科等の本質的な学びを踏まえた深い学び、アクティブ・ラーニングの視点が求められている。

筆者は、新型コロナ、ロシアによるウクライナ侵攻、世界的な物価高騰など歴史を画するような現代的な課題が山積するなかで、激変する世界を理解するには、高校地理歴史科、公民科、小中社会科の最新の教材開発とそのための現地フィールドワークが欠かせないと考ええる。

地理教育では、地域調査をはじめとするフィールドワークの実施が学習指導要領でも明確に位置づけられたが、中学校・高校での実施率は低い。フィールドワークの教育的な意義が十分に理解されているとは言えない状況にある(池ほか2020)。こうした状況を打開するためにも、現地フィールドワークの魅力を感じるような教材開発、とりわけ、49年ぶりの必修復活の「地理総合」のための世界地誌教材の開発が必要であると考えた。

筆者は、2019年8月には日瑞基金の支援を受けてスウェーデンを中心とする北欧の現地フィールドワークを行った。スウェーデン理解の基礎的研究のために、ゴッドランド島、ガムラ・ウプサラ、ハンザ同盟の史跡のフィールドワークを中心に整理した。2017年8月7日の朝日新聞の「19世紀から他国と戦火を交えずにきたスウェーデンが、ロシアによるクリミア半島併合などを受けて、北大西洋条約機構(NATO)の加盟申請、ゴッドランド島への常駐軍の再配置を進めている」という記事を紹介し教材化した(田部2020a)。

2022年2月21日、スウェーデン国内においても危機感が高まる中、ロシアのプーチン大統領が、ウクライナ東部で親ロシア派組織が名乗る「ドネツク人民共和国」と「ルガンスク人民共和国」の独立承認の大統領令に署名した。2月23日、ウクライナ全土に非常事態宣言、2月24日早朝にはウクライナ東部での「特別な軍事作戦」の実施が発表された。首都キーウ(キエフ)などへのミサイル攻撃や空爆が始まる。ウクライナのゼレンスキー大統領が戦時体制の導入を宣言し、ロシア軍がチェルノブイリ原発を占拠した。25日、国連安全保障理事会でロシア非難決議案を採決したが、ロシアが拒否権を行使した(2022年8月24日朝日新聞)。

その後も侵攻は続くが、ロシアが2月24日にウクライナに侵攻をはじめて半年を迎えた8月24日、国連安全保障理事会で、欧米6カ国がロシアを非難し、ロシアは逆に欧米を責める。ロシアへの非難の声明に名を連ねたのは米英豪やEUの国々で、ラテンアメリカ・カリブ海諸国は2カ国、アフリカはゼロだった。ケニアのキマニ大使は「核大国同士の直接の紛争はあまりに危険で、ほとんどが代理による衝突の形を取るだろう。アフリカや世界のその他の地域は、民主主義を打ち砕き、指導者を殺し、数十年分の経済発展を奪った冷戦へと再び放り込まれることになる」とした。緊張緩和を呼びかけたキマニ氏がロシアを直接非難することはなかった(2022年8月26日朝日新聞)。安保理をこれ以上分断させることに意味を見いだしていないようだった。安保理が具体的な行動に踏み込む見通しは立たない。

スウェーデンはフィンランドとともにNATO加盟申請を決め、再び対ロシアとの対立の最前線に立つ。ロシアのウクライナ侵攻で自国を取り巻く安全保障環境が一変した。長年守ってきた軍事的な中立政策を放棄し、バランス外交と決別することになった。ナポレオン戦争で多くの命と領土を失ったのを機に中立政策を志向したスウェーデンは、戦争に主体的に関与せず、約200年

にわたって中立を保ってきた(2022年5月17日 日本経済新聞)。

5月17日の新聞記事で注目したのは、スウェーデンとフランスとの関係である。注目の1点目は田部(2020a)でも注目したヴァイキングのフランス・ノルマンディーへの進出、2点目はフランスを舞台とした戦争(ナポレオン戦争)を機にスウェーデンが中立政策を志向した、という点である。地理教育におけるヨーロッパ理解、スウェーデン理解を進めるためにも、歴史的理解の必要を感じる。そこでスウェーデン・フランスからみるヨーロッパ理解のために、歴史的背景を踏まえた世界地誌教材の開発を考えた。

まず第2章では、ヨーロッパ理解のための地誌学的・歴史学的アプローチとして、関連する学会での取り組みや先行研究の整理を進めた。次に第3章では、教科書等資料と現地フィールドワークによる教材開発として、まず、日本の世界史教科書においてスウェーデンがはじめて登場する「ノルマン人のイングランド征服」について整理し、バイユー・タペストリー美術館を訪問して資料を収集し、整理した。第4章では、ナポレオン戦争とスウェーデンとの関係、特にナポレオン1世とナポレオン戦争に関する資料を整理し、パリを中心に関連施設を訪問した。また、フランス革命・ナポレオン戦争期のフランスの軍人・政治家ジャン＝バティスト・ジュール・ベルナドットと現スウェーデン王室ベルナドッテ朝の成立の関連について整理し、ストックホルムを中心に関連施設を訪問して資料を収集し整理した。

II ヨーロッパ理解のための地誌学的・歴史学的アプローチ

(1) ヨーロッパ理解のための地誌学的アプローチ

2020年3月26日、筆者は日本地理学会地理教育公開講座委員会主催の第37回日本地理学会地理教育公開座(日本地理教育学会との共催)のコーディネートをを行った。発表者は、企画・司会が田部、講演1:加賀美雅弘(東京学芸大)「BrexItからアプローチするEU/ヨーロッパ理解」、講演2:植松希世子(横浜国立大学)「フィンランドの視点から考える地理教育のグローバル化に向けた展開と課題」、講演3:高木優(神戸大学附属中等教育学校)「地理総合での地球的課題を主題とした学習が地理探究での地誌学習にどのようにつながるか」、コメンテーター・企画:永田忠道(広島大)、総括:濱野清(文部科学省)の順であった(田部2020b)。

ヨーロッパ理解のための地誌学的アプローチにあたって特に参照したのは、ヨーロッパ地誌研究の第一人者である加賀美雅弘教授が編集された『ヨーロッパ(世界地誌シリーズ)』(2019, 朝倉書店)である。目次は第1表の通りである。

加賀美は、「1 総論—統合に向かうヨーロッパの地域性」の「1.5 ヨーロッパへの地誌学的アプローチ」において、EUは、「国家の枠組みを超えた地域間の連携を強めながら、統合を進めている」とする。一方で、「EUという大きな枠組みのなかで自己主張に乗り出している事実」にも注目している。そして、ヨーロッパの地誌

第1表 『世界地誌シリーズ①ヨーロッパ』
(朝倉書店, 2019)の目次

1	総論—統合に向かうヨーロッパの地域性
2	自然環境
3	農業・農村
4	工業化の展開と空間的構成
5	都市の形成と発展・維持
6	観光地域と観光者流動
7	EU市民の暮らし
8	ヨーロッパ人の地理的想像力
9	移民と社会問題
10	統合するEUと国境地域
11	世界のなかのヨーロッパ

学的理解を進める上で、「EUにおける地域の位置づけの変化を見逃してはならない」とし、「国家を構成する諸地域の動向を明らかにする」こと、「異なる空間的スケールでの考察」が欠かせないとしている(加賀美 2017)。

2020年3月26日の日本地理学会地理教育公開講座で加賀美は、「1 イギリスのEU離脱」として、ヨーロッパを理解するための視点を、離脱理由と離脱によるEUの変化に注目しながら示した。次に「2 EUによる統合のシナリオとイギリスの思惑」として、離脱の背景とEUの経済的、政治的思惑について、わかりやすく説明していただいた。EUの政治統合のシナリオでは、EUへの帰属意識を高めることが期待されシェンゲン協定により国境の自由移動が実現したが、戦勝国であったイギリスはEUへの政治統合のシナリオに乗らず、シェンゲン協定も実施してこなかったため、今回の離脱も「起こるべくして起こった」と指摘している。また「3 EUを中心にしたヨーロッパ理解」では、EUを中心に据える理解、非加盟国ながらシェンゲン協定を実施し共通市場に組み入れられたノルウェーやスイスのような国、東南ヨーロッパのEU加盟を求める経済力の弱い国々という三つのセグメント相互の関係を重視した理解が求められる、とされており、ヨーロッパを概観的に把握する重要な視点を示して頂いた(加賀美 2020)。

(2) ヨーロッパ理解のための歴史学的アプローチ

小中高の地理教育におけるヨーロッパ理解の方向性を考えるために、歴史的背景、とりわけ政治史的背景を中心に整理した。西洋史、西洋経済史の第一人者であった増田(1967)によると、ヨーロッパとは英語では Europe、語源はギリシア神話のエウロペで、ゼウスが略奪したティルス王の娘の名のことである。やがてギリシアの中心部を指す地名に転じ、さらに現在のトルコをアジアというのに対して、その西側の広い地域を示すようになった。古代ギリシア・ローマ時代は地中海に面した現在の南ヨーロッパが先進地域であり、他のヨーロッパの広大な地域はケルト人やゲルマン人、スラヴ人などの居住する後進的な周縁部であった。西ヨーロッパを中心としたヨーロッパ概念が出来上がるのは、キリスト教世界という文化的な統一、ゲルマン人のフランク王国の成立という政治的統一で、その象徴的な出来事がフランク王国のカールの戴冠(800年)であった。

増田(1967)は、「IV古代世界の没落について」の「(1)ヨーロッパ史における時代分けの問題」において、ヨーロッパ人の常識ではヨーロッパとは、①古典古代の伝統、②キリスト教、③ゲルマン民族の精神、の三つが文化の要素としてあらゆる時代、あらゆる事象に組合わされたもの、ということになっている。ヨーロッパが何か行き詰まったときには、いつでも①～③の三つの要素のいずれかに重点を置いて打開策を考えようとする傾向がみうけられる、とし、「恐らく今後もヨーロッパは世界の諸影響を受けながらも、この三つの要素をふまえたもろもろの打開策を打ち出すにちがいない」(増田 1967, pp.62-63)としている。

元外交官でスウェーデンに関する書籍を多数出版している武田龍夫によると、スウェーデンは、スカンディナヴィア半島東側にノルマン人が建設した国で、14世紀にカルマル同盟に属した後、16世紀に独立、17世紀に全盛期となってバルト海全域を支配した(武田 1993)。

グスタフ＝アドルフ国王が中央集権化を進め、三十年戦争に参画した。1648年のウェストファリア条約では大陸側に領土を拡張して「バルト帝国」と言われる覇権を確立した。それに対し、デンマーク・ポーランドは警戒を強め、またロシア(ロマノフ朝)のピョートル1世もバルト海

方面に進出を狙った。若きスウェーデン王カール 12 世はそれらの周辺国との戦争に突入、1700 年に北方戦争となった。カール 12 世は緒戦においてナルヴァの戦いに勝利し、ロシアに深く侵攻したが、戦争の長期化は次第にスウェーデン軍を不利に導き、その間、ロシアは態勢を整えた。カール 12 世はウクライナに進出し、コサックの棟梁マゼッパをロシア側から離反させ、共同してロシアを攻略しようと 1709 年のポルタヴァの戦いを戦ったが、敗北を喫した。オスマン帝国に亡命したカール 12 世は再起を期し、オスマン帝国とロシアの戦争に期待したが、1711 年に講和が成立したため不首尾に終わった。さらにカール 12 世はロシアへの反撃を企てたが、1718 年に戦死した。1721 年にスウェーデン・ロシアはニスタットの和約で講和、スウェーデンは急速に大国の地位から後退することとなった。かわってロシアが「バルト海の覇者」として大国として有力となっていく。1756～63 年の七年戦争ではフランス側に立ってプロイセンと戦い、1771 年即位したグスタフ 3 世は王権強化を図ると共に文化の保護にもあたり、人気の高い王であったが、1792 年の仮面舞踏会で近衛士官に銃撃されたのがもとで死ぬという事件が起こった（武田 1993）。

18 世紀末に始まったナポレオン戦争ではイギリスと結び大陸封鎖令に従わなかったため、フランスに従ったロシアとの間で戦争となりフィンランドを失った。かつてバルト帝国と言われる強国であったスウェーデンが、ナポレオン戦争などの度重なる戦争で領土を失い「小国」となったことを自覚し、国際情勢にどう関わるべきか考えた結果、今後はヨーロッパの戦争に関与しないという中立政策を選んだ。その後、スウェーデンの「中立政策」は国是として守られ、時期的なブレや時の政権による秘密外交があったとしても、2022 年まで 200 年近くにわたって守られていた（2022 年 5 月 20 日 朝日新聞）。

当時の状況について資料を調べてみると、1810 年、ヴァーサ王朝のカール 13 世に継嗣がないため、議会はナポレオンの部下である将軍ベルナドッテ（1763-1844）を皇太子として迎えた。ベルナドッテは国益を守るためにナポレオンと対立し、1813 年の諸国民戦争（ライプツィヒの戦い）に参加し、ナポレオン軍を破った。スウェーデンが中立宣言をしたのは、ベルナドッテが、スウェーデン＝ノルウェー連合王国の国王として 1818 年から死去する 1844 年まで国王カール 14 世ヨハンとして在位し、1834 年に「中立」を宣言したことによる、とされる。ベルナドッテはスウェーデンを維持し、ベルナドッテ王朝として現在に続いていることがわかったが、その事情をもう少し詳しく現地の資料で裏付けてみたい。

Ⅲ 教科書資料と現地フィールドワークによる教材開発（1）

ー スウェーデンとフランス・ノルマンディー地方に関連を中心にー

3 章では高校世界史教科書と米国で入手した地理教科書を中心にスウェーデンとフランスに関する記述の分析と現地フィールドワークによる教材化を進めた（第 1 図）。

高校世界史 B 教科書（山川出版社）でスウェーデンがはじめて登場するのが、ノルマン人のイングランド征服の図である（第 2 図）。

キャプションには「ノルマン人のイングランド征服」とあり、イングランドの港に上陸して戦場に急ぐノルマン軍。11 世紀後半につくられた幅 50m、長さ 70m のバイユー刺繍画の一画面で、



第1図 ストックホルム、パリ、バイユー・タペストリー美術館の位置



第2図 ノルマン人のイングランド征服 イングランドの港に上陸して戦場に急ぐノルマン軍。
11世紀後半につくられた幅50cm、長さ70mのバイユー刺繍画の一場面。両端が反りあがった長い船がヴァイキング船。出典：『詳説世界史 改訂版』（高校世界史B教科書，山川出版社）

そり上がった長い船がヴァイキング船の特徴を表している。以下は「ノルマン人のイングランド征服」に関連する記述の抜粋である。

スカンディナヴィア半島やユトランド半島には、ゲルマン人の一派（北ゲルマン）に属するノルマン人が住んでいた。彼らの一部は8世紀後半から、商業や海賊・略奪行為を目的として、ヨーロッパ各地に本格的に海上遠征をおこなうようになった。ヴァイキングとしておそれられた彼らは細長くて底の浅いヴァイキング船に乗り、河川をさかのぼって内陸深く侵入した。10世紀初めロロが率いる一派は、北フランスに上陸してノルマンディー公国をたてた。ここからさらにわかれた一派は、12世紀後半、南イタリアとシチリア島に侵入し、両シチリア王国（ノルマン＝シチリア王国）を建国した。また、大ブリテン島の中・南部を占めるイングランド（イギリス）に成立していた（中略）。1066年、ノルマンディー公ウィリアムが王位を主張して攻め込み（ノルマン＝コンクエスト）、ウィリアム1世として即位してノルマン朝を立てた。一方、リューリックを首領とするノルマン人（ルーシ）はドニエプル川流域のスラヴ人地域に進出して、9世紀にノヴゴロド国を、ついでキエフ公国を建設し、これがロシアの起源となった（中略）。ノルマン人の原住地にはデンマーク・スウェーデン・ノルウェーの諸王国がたてられ、彼らがキリスト教化されると、ようやくノルマン人の移動も終わった。こうして北欧は西ヨーロッパ世界に組み入れられることになった。



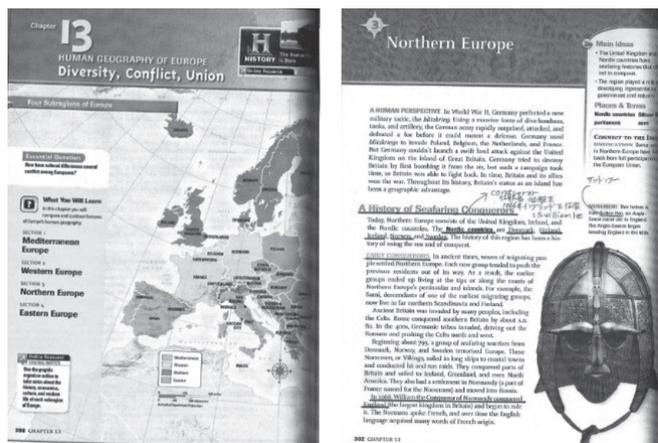
第3図 9～12世紀のヨーロッパ
 出典：『詳説世界史 改訂版』（高校世界史B教科書，山川出版社）

第3図には9～12世紀のヨーロッパを示した。第2次民族移動ではヴァイキングはゲルマン人の一派としてとらえられており，ノルマンディー公国をたて，南イタリアとシチリア島に侵入し，両シチリア王国（ノルマン＝シチリア王国）を建国する。ノルマン人の一派（ルーシ）はスラブ地域に進出してノルマン人の占領地として示されており，9世紀にノヴゴロド国，ついでキエフ公国を建設し，ロシアの起源になっていることがわかる。このあとは「封建社会の成立」に続いている。ノルマン＝コンクエストを最後に，ヨーロッパにおける民族の大規模な移動の時代は終わり，イギリスは海峡に守られて独自の重層的文化を形成していくこととなる。

一方第4図は，米国で実際に使われている Houghton Mifflin Harcourt 社発行の米国人文地理教科書『Global Geography2019』で，2020年2月調査時に Venice High School（ヴェニス高校 米国カリフォルニア州ロサンゼルス市）で使用されていた教科書である。

「13章 ヨーロッパの人文地理」の主な問いは「文化の違いがいかにヨーロッパ人の対立を生んでいるのか」，というものであり，地中海ヨーロッパ（Mediterranean Europe），西ヨーロッパ，北ヨーロッパ，東ヨーロッパの順に節立てされている。第4図にはヨーロッパ全体の頁と北ヨーロッパの頁の一部を示した。

「第13章 ヨーロッパ」では左下に「オンライン・リソース」が



第4図 Houghton Mifflin Harcourt 社発行の米国人文地理教科書のヨーロッパ概要の一部(左図)，北ヨーロッパの頁の一部(右図)。
 出典：『Global Geography2019』

示され、人文地理の授業において、「ヨーロッパの各地域の歴史、経済、文化、現代生活についてノートを取るために、オンラインにある教育学習ツールを使用する」といったように歴史や公民の分野についても興味を持たせている。

「3節 北ヨーロッパ」では「人生観(human perspective)」として、第二次世界大戦下のドイツが、ポーランド、ベルギー、オランダ、フランスには侵攻したが、島国であるイギリスには攻撃を速やかに行うことができなかったことに触れている。そこで「北欧の征服者」として、デンマーク、フィンランド、アイスランド、ノルウェー、スウェーデンが示され、征服者としてのノルマンディー公ウィリアムと1066年のノルマン＝コンクエストが中心的なトピックとして扱われている。その内容は先述したように日本の世界史教科書Bで扱われているものとはほぼ同じ内容である。

米国高校地理教科書『Global Geography2019』の教師用指導書には、3節の目標として、1. 海の征服者とイギリス帝国の成立について学ばせ、2. 現在に至る歴史の流れについて説明させ、3. 北ヨーロッパの経済の主な流れを認識させ、4. 現代北ヨーロッパ文化について説明させ、5. 現代北ヨーロッパの生活について学ばせている。

また、スキルの構築:地図の解釈、となっており、地理的思考力では、seeing patterns(見立て)、地図帳の利用、原因・結果の判断、となっており、多様な資質・能力の育成を図っていることがわかる。

【現地フィールドワーク】 バイユー・タペストリー博物館(仏: La Tapisserie de Bayeux)(写真1)の現地フィールドワークについてである。第1図の長さ70mという長さのバイユー刺繍画バイユー＝タペストリーを実際に見てみたくなった。探してみるとフランスのノルマンディー地方のバイユーに残されていることがわかり、現地フィールドワークを実施した。パリのサン＝ラザール駅を6:12発、8:41バイユー着であった。そのあとの列車は接続が午後まで接続が上手くいかなかった。博物館の開館は9:00であったが、開館前から多くの入場者がまちわびていた。

バイユー＝タペストリーには1066年のノルマンディー公兼イングランド王ウィリアム1世によるインノルマンディー物語が描かれており、全58場面、博物館内は入口にあるウィリアム1世の騎馬像(写真2)等以外は撮影禁止であった。約70メートルのタペストリーが広げて長く展示されているのが素晴らしく、場面ごとの解説を日本語音声で聞くことができた。世界史教科書の第1図はそのごく一場面であることがわかる。物語は、エドワード懺悔王がギヨーム2世を後継者とするためにハロルド・ゴドウィンソン(ハロルド2世)を使者として送る場面から始まり、ハロルド2世の戦死と敗残兵追撃の場面(ヘイスティングズの戦い)で終わっている。タペストリーは、織物ではなく亜麻で作った薄い布(linière)に刺繍によって描かれた刺繍画である。元々



写真1 バイユー・タペストリー美術館の外観



写真2 バイユー・タペストリー美術館のウィリアム1世の騎馬像

の寸法は、長辺約 70 m だったと考えられているが、現存している部分は長辺が 63.6 m、短辺は約 0.5 m である。

18 世紀まで本作品の存在は忘れ去られており、1803 年にナポレオンがパリに持ち帰ったが、これはイギリス侵攻の参考にするためであったという。その後、バイユーに戻されたが、第二次世界大戦中にはドイツ軍が接収した。戦後、フランスに戻り、ルーヴル博物館の地下に保管されていた。現在はバイユー・タペストリー博物館に保管・展示されている。

IV 教科書資料と現地フィールドワークによる教材開発 (2)

ー スウェーデンとナポレオン 1 世の関連を中心にー

(1) ナポレオン 1 世

ナポレオン・ボナパルト (Napoléon Bonaparte 1769- 1821) は、コルシカ島の貴族の家に生まれた。フランス革命期の軍人で、フランス第一帝政の皇帝に即位してナポレオン 1 世 (1804 年 ~ 1814 年, 1815 年) となった。フランス革命後の混乱を收拾し、軍事独裁政権を樹立した、とされている。大陸軍 (Grande Armée) と名づけた軍隊を築き上げて、フランス革命への干渉を図る欧州諸国とのナポレオン戦争を戦い、幾多の勝利と婚姻政策によって、イギリス、ロシア帝国、オスマン帝国の領土を除いたヨーロッパ大陸の大半を勢力下に置いた。

ナポレオン 1 世は征服した各地に自分の親族を支配者として配置した。自身はフランス皇帝であるとともにイタリア王を兼ね、兄ジョゼフはナポリ国王とした後、スペイン国王とした。弟ルイはオランダ国王、弟ジェロームはドイツ西部のウェストファリア国王、妹エリザはイタリア中部のトスカナ大公妃、妹カロリーヌの夫ミュラ元帥はベルク大公の後にナポリ国王とした。ナポレオンは一族の力でヨーロッパ統合の夢を実現しようとした。

ナポレオンはアウステルリッツの三帝会戦の翌年の 1806 年、その勝利を記念してパリに凱旋門の建造に着手した。それが現在のエトワール広場の凱旋門である。しかし、その完成を待たずにセントヘレナ島に流され、1821 年にその地で死んだ。凱旋門が完成したのはようやく 1836 年のことだった。ナポレオンは生きて凱旋門をくぐることはなかった。七月王政時代の 1840 年、ナポレオンの遺体はパリに移されることになり、凱旋門をくぐって、アンヴァリッド聖堂に埋葬された。その後、対仏大同盟との戦いに敗北し、百日天下による一時的復権を経て、南大西洋の英領セントヘレナにて没した (レンツ 1997)。

【現地フィールドワーク】サン＝シュルピス教会は、サンジェルマン地区にあるカトリック教会で、1745 年に完成した。エジプト遠征から帰還したばかりのナポレオンを利用した軍事クーデターである「ブリュメール 18 日のクーデタ」(1799 年 11 月 9 日) を起こす 3 日前に 700 人を集めた会がサン＝シュルピス教会で挙行された、とされている (写真 3)。教会の中には 2006 年の映画「ダ・ヴィンチ・コード (The Da Vinci Code)」の中の重要な舞台で、秘密を解く鍵として描かれていた日時計が写真右奥に見える (写真 4)。この軍事クーデターは 1795 ~ 1799 年のフランス共和政の行政府である



写真 3 サン＝シュルピス教会の外観

総裁政府の実権を握ったエマニュエル＝ジョゼフ・シエイエス (Emmanuel-Joseph Sieyès 1748-1836) らが起こしたが、次第に軍事力を有するナポレオンに主導権を奪われていく。これによってフランス革命は終わったとされる。

凱旋門は、アウステルリッツの戦い (1805年12月2日) の際にオーストリア領 (現チェコ領) モラヴィアのブルノ近郊の町アウステルリッツ (現在のスラコフ・ウ・ブルナ) 郊外で、ナポレオン・ボナパルト率いるフランス軍 (大陸軍) が、ロシア・オーストリア連合軍を破った戦いに勝利し、その記念に1806年、ナポレオン・ボナパルトの命によって建設が始まった (写真5)。凱旋門の外壁にはアウステルリッツの戦いをはじめ戦いの様子が彫刻されている。屋上に上ることができ、凱旋門を中心に、シャンゼリゼ通りをはじめとして12本の通りが放射状に延びていることがよくわかる。その形が地図上で光り輝く「星＝étoile」のように見えることから、星の広場 (la place de l'Etoile) と呼ばれていた。

アンヴァリッド聖堂 (Les Invalides) は、旧・軍病院で立派な建物である (写真6)。オルレアン朝 (1830-1848年) 時代、ルイ・フィリップ国王により、ドーム教会に地下墓所が設けられ、ナポレオン・ボナパルト (フランス皇帝ナポレオン1世) の柩が中央に置かれた (写真7)。また、それを囲むようにして、ナポレオンの親族やフランスの著名な将軍の廟が置かれている。

(2) カール14世ヨハン (スウェーデン王) とナポレオン

カール14世ヨハン (Karl XIV Johan, 1763-1844) は、フランス南西部のポー (Pau) で出生し、スウェーデン＝ノルウェー連合王国の国王として1818年 (55歳) から死去する1844年 (81歳) まで在位した。フランス革命・ナポレオン戦争期のフランスの軍人・政治家ジャン＝バティスト・ジュール・ベルナドット (Jean-Baptiste Jules Bernadotte) であり、フランスの平民階級出身者であった。ナポレオン・ボナパルトのライバルと目された人物で、1799年の「ブリュメール18日」



写真4 サン＝シュルピス教会の日時計



写真5 凱旋門の外観



写真6 アンヴァリッド聖堂 (Les Invalides) の全景

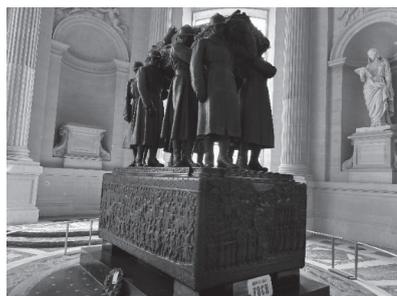


写真7 ナポレオン・ボナパルト (フランス皇帝ナポレオン1世) の棺を運んでいる様子 (アンヴァリッド聖堂)。

のクーデターでフランスの政権を握ったナポレオンに対し反対姿勢をとったが、ナポレオンが皇帝に即位した1804年に和解し、帝国元帥に任命され、ナポレオン戦争に従軍し、アウステルリッツの戦いなどで戦功をたてる。

1810年にスウェーデン議会によって同国の王位継承者に選任され、カール・ヨハンと改名し、後継者のいなかったカール13世(1748-1818)に代わってスウェーデンの国政の舵取りを行うようになった。ベルナドット朝はベルナドットの名前を由来としており、現在のスウェーデン国王カール16世グスタフ(1946-)まで続くスウェーデン王家ベルナドッテ朝の始祖である。

【現地フィールドワーク】カール14世ヨハンの銅像は王宮前にある。戴冠式は1818年5月11日にストックホルム大聖堂で行われ、死去は1844年3月8日、リッダーホルム教会(Riddarholmen Church)に埋葬された。カール14世ヨハンの銅像(Charles XIV John's statue)はガムラ・スタンの王宮の目の前、バルト海に向かって立っていた(写真8)。高さ約4.5メートルの騎馬像で1854年に作製とあった。1810年に元帥杖を持って新たに選出された皇太子としてストックホルムに入城したことを表している。王宮周辺を何度も通り過ぎ写真も撮影しているの、今回の調査を通じ再発見できたと言ってよいであろう(写真9)。

なお、ノルウェー・オスロのカール・ヨハン通り(Karl Johans gate)は、王宮やオスロ中央駅、国会議事堂が隣接するオスロの主要大通りであるが、この地名はベルナドッテ朝初代スウェーデン=ノルウェー連合国王カール14世ヨハン(ノルウェー国王としてはカール3世ヨハン)による。ノルウェーとフランスの重層的な関係も垣間見たように思う。

ストックホルム市立博物館(スウェーデン語: Stadsmuseet)は、スルッセン地区にありストックホルムの約500年の歴史をわかりやすく示している。ストックホルム市民の生活史が中心であった。

ストックホルム陸軍博物館(スウェーデン語: Armémuseum)は、市内エルテルマルム地区にある軍事歴史博物館である(写真10)。等身大の人形やスウェーデン軍の参加した大きな戦場の情景が音声も含めて



写真8 カール14世ヨハンの銅像。王宮の目の前に、バルト海に向かって立っている。



写真9 カール14世ヨハンの銅像(写真8を別の角度から撮影)。右側に見えるのは王宮、左側に見えるのは大聖堂でどちらも修繕中である



写真10 スtockホルム陸軍博物館の外観

アルに再現されていて、恐いほどである(写真11)。スウェーデンの国土が大きくなり、そして小さくなる時に激しい戦争が起き、被害の酷さが実感できる。

北方民族博物館(スウェーデン語: Nordiska museet)は、ユールゴーデン島にある博物館である。近世初期(スウェーデンの歴史では1520年以降)から現代にいたるスウェーデン文化史と民族誌の資料を展示している。ここで注目したのは、「パリの北」の展示と地球温暖化問題の展示であった。ストックホルム、スウェーデンにとってパリは特別な存在であることを象徴しているかのようであった。

国立美術館(スウェーデン語: Nationalmuseum)はエステルマルム地区にあり、王家が収集した17世紀のオランダ絵画、18世紀のフランス絵画が中心である。パリが美の都となった18世紀初頭にフランスで開花した装飾性が強いロココ美術が心をとらえる。ガムラ・スタンで生まれた画家カール・ラーション(1853-1919)をはじめとする17世紀以降のスウェーデンの美術品も特徴的で、正面入り口のホールの壁を飾る巨大なフレスコ画は、ラーションの大作だが、息をのむような美しさである。国立美術館の2階入り口にはカール14世ヨハンの立派な肖像画が飾られていた(写真12)。



写真11 スtockホルム陸軍博物館の戦闘シーンの展示



写真12 国立美術館2階入り口に展示されているカール14世ヨハンの肖像画

V おわりに

本稿は、スウェーデン・フランスからみるヨーロッパ理解のための世界地誌教材の開発として、2章ではヨーロッパ理解のための地誌学的・歴史学的アプローチを整理した。3章では北欧スウェーデンの登場とノルマンディー、4章では、ナポレオン1世、カール14世ヨハン(スウェーデン王)とナポレオンの順に教科書等資料と現地フィールドワークによる教材開発を行い整理した。

3年振りの海外調査でいろいろ配慮しながらの実施であるし、筆者自身の勉強不足は否めないが、スウェーデン、フランスともコロナ禍対応に配慮しながら、博物館などの調査も予想以上にスムーズに進めることができた。

今回のフィールドワークにおいて、第1にヴァイキングがノルマンディーに進出し、ノルマン=コンクエスト(1066年)の時代からフランスとイングランド、そしてスウェーデンとのつながりがあり、その歴史を大切にしていることがバイユーのタペストリー美術館を訪問することによって実感をもって知ることができた。現代においても、日本の新聞で扱われたり¹⁾、市民がバイユーのノルマン=コンクエストのタペストリーを作成することや²⁾、仏首相が英国にタペストリーを貸し出したりすることが報道されたりしている³⁾。

第2にナポレオン戦争とスウェーデンとの関係、そして、現スウェーデン王室の始祖がフランス人であったこと、その後ナポレオン1世と対立しながらもスウェーデンの国益を守り、現在まで王室が現在まで200年以上続いていること等をあらためて知ることができた。

本稿は、スウェーデン・フランスからヨーロッパ理解としての世界地誌教材の開発を目的としたが、世界地誌教材を開発するためには世界史的背景が必要なことを痛感した。今後も地理歴史科としての教材開発を考えていきたい。

また、現代的な課題である人権を考えるための公民を含む社会科としての教材開発にも発展できるのではないかと考えた。日本社会は、多数の金銭トラブルを抱え長年にわたって社会問題を起こしてきた宗教団体と政治の密接な関りが報じられる等、社会全体を根底から考え直す時期にあると考える。「政教分離」に最も厳格とされるフランスは革命期の国民議会在カトリックに対して財産没収などの弾圧により、国家と宗教を力づくで分離した、とされる(神里2022)。地理教育も歴史、公民との連携が必要であるし、スウェーデンやフランスから学ぶ点も多い。今後の海外短期研修における事前学習の教材の一部として活用して頂ければ望外の喜びである。

謝辞

本研究の実施にあたっては、総合研究所研究課題78「スウェーデンで学ぶSDGsプログラム—全学共通科目の開発—」の一部を使用した。また、フランス・ブルゴーニュ地方出身で多文化教育が専門のVéronique Simon ウプサラ大学教育学部シニア・レクチャー、浅野由子日本女子大学家政学部児童学科専任講師からは有益な示唆を得た。ここに記して感謝申し上げる。

注

- 1) 「[王の綽名][征服王]イングランド王」(日本経済新聞2022年5月21日)。主に中世から近世にかけてのヨーロッパを舞台とした歴史小説を多く書き、1993年、東北大学大学院在学中に『ジャガーになった男』で第6回小説すばる新人賞を受賞、1999年、『王妃の離婚』で第121回直木賞を受賞した作者の佐藤賢一(1968-)は、史実をもとにしながら登場人物たちの濃厚な性格描写などで知られる。

2022年5月21日の日本経済新聞には「[王の綽名][征服王]イングランド王」として、以下の寄稿がある。

1066年9月28日、ノルマンディ公ウィリアムが海を渡り、イングランドに上陸したのは、この国の王になるためだった(中略)。ノルマンディ公ウィリアムは1万2千の軍を率いて、イングランドに上陸した。10月14日に迎えたヘイスティングスの戦いでハロルドの軍を打ち破り、12月25日、ロンドンのウェストミンスター寺院でイングランド王に即位した。いわゆる「ノルマン・コンクエスト(ノルマン人の征服)」であり、このウィリアム1世の綽名が「征服王(ザ・コンカラー)」と実にわかりやすい。説明すべきは、むしろ「ウィリアム」のほうか。ノルマンディ公、ノルマンディ公と無造作に繰り返してきたが、その公領は北フランスにある。ノルマンディ公とはフランスの諸侯、つまりはフランス人なのだ。西フランク王シャルル3世に領地を与えられたヴァイキング、ロロの末裔(まつえい)なので、北欧系フランス人というべきかもしれないが、定住して数世代を経れば、喋(しゃべ)る言葉はフランス語になっている。名乗りもフランス名前の「ギョーム」であり、やはり繰り返してきた「ウィリアム」は、実は後の世の英訳にすぎない。その綽名にせよ、「征服王ギョーム(ギョーム・ル・コンケラン)」とするのが、本当なのだ。

- 2) 「バイユーのタペストリー 複製5年ようやく折り返し」(英国AFPニュース 2022年3月20日)
https://www.afpbb.com/articles/-/3395090?cx_part=common_focus
イギリスに移り住んで20年以上になるスウェーデン生まれのミア・ハンソン (Mia Hansson) さん (47) は、世界的に有名な織物「バイユーのタペストリー (Bayeux Tapestry)」の複製を実物大で制作している。2016年から作業を開始し、このほどようやく折り返し点まで来た。イングランドで約1000年前に制作されたと考えられているオリジナルは、2007年に国連教育科学文化機関(ユネスコ)の「世界記憶遺産」に登録されており、ハンソンさんは「記憶に間違いがなければ、(使用する)毛糸は全部で約8000メートルです」と話す。完成の目標は今から5年後、着手した日からちょうど11年後となる2027年7月13日だそうだ(英国AFPニュース 2022年9月1日閲覧)。
- 3) バイユー・タペストリー博物館によると、バイユー・タペストリーの英国への最終的な貸与が発表されて以来、フランスと英国の文化省の間で行政協定が調印され、両国間の文化交流の道が開かれた。2020年1月、劣化が明らかになったバイユー・タペストリーの調査の結果を受けて、新しい博物館の建築工事のために閉鎖される2024年末までに修復が必要なことを勧告した。

文献

- 池俊介・吉田裕幸・山本隆太・齋藤亮次 2020. 地理教育におけるフィールドワークの類型化に関する試論. 早稲田教育評論 34(1):1-19.
- 加賀美雅弘 2019. 総論－統合に向かうヨーロッパの地域性. 加賀美雅弘編『世界地誌シリーズ 11 ヨーロッパ』1-7. 朝倉書店.
- 加賀美雅弘 2020. Brexit からみる EU/ ヨーロッパ理解. 新地理 68(2):62-65.
- 神里達博 2022. 「世間」に人権思想はあるか. 朝日新聞 8月26日.
- 武田龍夫 1993. 『物語北欧の歴史』中公新書.
- 田部俊充・定行まり子・高野由美子・請川滋大・加藤美由紀 2017. 2016年度日本女子大学人間社会学部学術交流研究事業報告「スウェーデンにおけるESDの取り組み－ウプサラ大学との研究教育協力・連携を目指して－」, 日本女子大学人間社会学部.
- 田部俊充・入野貴美子・浅野由子・定行まり子・宮崎あかね・安藤朗子・齋藤慶子・郭明 2019. 日本女子大学人間社会学部学術交流研究事業「スウェーデン社会から学ぶ Part2－海外研修・国際交流事業の充実に向けての連続講演会・教材開発」, 日本女子大学人間社会学部.
- 田部俊充 2020a. スウェーデン理解のための観光教育教材の開発－「世界遺産ヴィスビー」「世界遺産ビルカ」「ガムラ・ウプサラ」を中心に－. 日本女子大学人間社会学部紀要 30:53-64.
- 田部俊充 2020b. 第37回日本地理学会地理教育公開講座報告 世界地誌学習の新たな方向性－ヨーロッパ・企画趣旨－. 新地理 68(2):58-61.
- 田部俊充・浅野由子 2021. スウェーデン海外教育研修の概要と地域連携－ウプサラ大学とのSDG s (Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標) プログラムの開発に向けて－. 日本女子大学教職教育開発センター年報 7:39-49.
- ティエリー・レンツ著, 福井憲彦監修, 遠藤ゆかり訳 1999. 『ナポレオンの生涯』創元社.
- 増田四郎 1967. 『ヨーロッパとは何か』岩波新書.